

小説同人誌評 24

花火を見ること

細見和之

前回、この同人誌評の今後の不透明さについて記した。「樹林」の春号と夏号、秋号と冬号を合併号とする計画については、予定どおり進みつつある。それに合わせて、本欄の小説同人誌評と詩時評は、従来どおり年四回とし、ただし、紙媒体の雑誌ではなく、ウェブ上で公開とした。これによって、半年に一回の執筆という難しい状態は回避できるうえ、こういう時評的なものにとつてウェブでの公開はかえって便利という気もしている。パソコン環境の整っている読者なら、紙媒体よりもずっとアクセスが容易だからである。

ただ、本欄で採り上げさせていたたいた作者や編集部、版元にはこれまでそのつど雑誌を贈呈してきたが、それができなくなる。そもそもここで採り上げたこと自体の連絡がしにくくなるのだ。その点では情報の拡散の方法にひと工夫が必要になる。ともあれ、こういう状態でこの小説同人誌評をしばらく私が

続けることになった。

さて、今回読んだなかで一冊の雑誌として充実した印象を受けた筆頭は、「飢餓祭」第45号だった。

同誌掲載の、秋元潔「父といた夏」は、一九七五年夏の設定で、一種、理想的とも呼べる父と息子の関係を、息子である「ぼく」の視点で描いている。父は四国の田舎で優れた開業医をしているが、五年に一度くらい行方不明になる奇癖の持ち主。一方「ぼく」は東北の大学の医学部に入学したものの、アメリカ文学に興味を持っていて、文学部に転じることを考えている。そんなとき、またぞろ行方不明になった父が「ぼく」の下宿にひょっこり姿を見せる。

父の奇癖の背景には痛切な戦争体験があって、五年に一度は死んだ「戦友」の墓参りをし、記憶の膿を流すためにあびるように酒を呑んでいたのだ。物語の最後で、父は海で溺れた子どもを助けるために死んでゆく。「ぼく」は父亡きあとと一家を支えるために、

文学研究者の道を断念する…。

とにかく父親の人物像が興味深いうえ、「ぼく」の友人である山崎、恋人の洋子など、魅力的な登場人物もきちんと配されているのに、二十ページ足らずではいかにももったいないという気がする。もともと物語として膨らませて欲しいと思わずにいられない。

同誌掲載の、小網春美「ガロア」は、五代から六十代の人間の居場所をめぐる好短篇。タイトル「ガロア」は、住宅の立て込んだ一角にある小さな飲み屋の名前。高名な数学者の名を冠したその飲み屋に、高校で国語の常勤講師をしている乙崎紀葉がふと訪れる。店主と文学談義を交わす常連客、現代アーティストを自認しているブティックの女性店員。画塾を開いている清貧の画家…、とにかく彼女のそれまでの人生では出会わなかった不思議な連中がたむろしている場なのである。私自身、六十代が近づくなかで、こういう一種ユートピア的な場所の魅力がよく分かる。

最後、「ガロア」は、老朽化した建物の取り壊しによって、あっ気なく閉店してしまう。自然に生まれて、自然に消滅してしまう、そういう場なのだろう。目的意識的に創出しようとして維持しようとしたらすると、どうしても歪みが生じてしまう。それだけに、乙崎のまだ知らないところで、すでに別の「ガロア」が出来ているのかもしれない。

同じく同誌掲載の、森口順子「石を抱く樹」は、「ガロア」と同様のユートピア的な場における家族の再生の物語。

主人公の沢田保は現在、三十六歳。勤めていた会社で工場閉鎖の仕事をやられ、その後退職。二年後、妻は離婚届けを残して長男とともに家を出ていった。しばらく閉じこもり

の生活をしたあとで、いまは、かつて両親とともに過ごしていたログハウスに車で向かうところ。パブルの全盛期のことだろうか、琵琶湖のほとりに、いくつかの家族がログハウスの別荘をもって「若葉の里」というその場所、休日を過ごしていたのである。そこで保はかつての里の住民「カモさん（鴨志田）」と出合い、彼とともに、アルバイトをしながら里の再生の活動に携わる。四、五年をへて、保の別れた妻ユカリが長男の翔一を連れて里を訪れる。ユカリは再婚し、女の子を出産していたが、再婚相手と翔一の折り合いが悪く、翔一は里で保が預かることになる…。

タイトルの「石を抱く樹」は、里の守り神のような存在。里の遊び場に自らの根で石を抱えるようにして生えている木があって、十歳の保はその木のみもとで身動きせずに佇んでいたことがあった。人間の生きていない時間とその樹木の生きてきた時間、その樹木がこれからも生きてゆく果てしない時間、その落差に十歳の保は恐れをなしたのだ。以後、その樹木は里の人々にとって一種崇拜の対象となったのだ。

一九七〇年前後に一部で展開されたコミュニケーション運動のような理念主義ではなくて、もっとゆるやかな共同性の探究——。そこに、保だけではない、およそ人間の再生の可能性が賭けられていて、印象深い作品だ。

最後に同誌掲載の、夏当紀子「花火は見えなか」にもふれないわけにはゆかない。こちらには、八十三歳の老婆をめぐる、不思議な民話のような物語。

八十三歳になった七重（なえ）は、大阪で管んできた荒物店を閉めて、孫のよしおの車（明記されていないが、淡路島だろう）に向かっている。久し振りに両親の墓参りをするためである。墓参りを済ませたところで、両親の家で独り暮らしを続けている弟が迎えに来てくれる段取りである。予定どおり今度は弟の軽トラックで祖父母が建てた家にたどり着くと、すっかり様子が変わっている。以前の家は大雨のときに土砂に埋もれてしまったのだという。

弟の軽トラックに揺られながら、七重は弟と自分のこれまでのことを振り返る。弟が一歳のときに母が病死し、しばらくは島の祖母のもとで育てられ、父は大阪に出て行った。やがて祖母が体調を崩してからは、父が二人を引き取った。父は弟にいつも厳しくあたり七重はそれを庇えなかった。それが七重にはずっと負い目になっている。しかも、父は戦死してしまふ。しかし、弟は何一つ覚えていないという。はつきりと老いを迎えている七重には、かつてあったこと、いや、いま自分がいるところすらあやふやになつてゆく。最後は、鳥で七重の世話を焼いてくれた弟の実

在さえ作品のなかで宙吊りにされてしまふ。

タイトルの「花火は見えなか」は、終わりのところで、大阪の花火が鳥から見るといふ弟の話とそのまま結びついている。いつの間にか弟はいなくなっている状態で、七重はひとりですべての花火を見る。しかし、音は聞こえない。遠いからか、七重の聴力が衰えているからか。それにしても、花火ほどあやふやな存在はないかもしれない。「見た」と口にするそのときには、もうその花火は消え失せているからだ。それでも花火を見ることが生きていることではないか、という作者の強いメッセージを、私はこの作品から受け取った。

『あるかいど』第66号も力作が並んで充実している。

同誌掲載の、住田真理子「死にたい病」は、夫を亡くして以降、何かについて「死にたい、死にたい」と口にして、周囲を困らせ続ける母親の姿を、娘の視点で描いている。母親が「死にたい病」なのだから、かなり事態は深刻なのだが、ある種滑稽な場面も登場する。作者と同世代の私は、私自身の母とやり取りを思つて、読みながら、領いたり苦笑したりの連続だった。くわえて、作者は作家、木辺弘児の娘であつて、小説とはいへ、読者がこれを作者の父、木辺弘児とその妻（作者の母）の物語としても読むことを覚悟のうえで書いているだろう。それにしても、ここで描

かれています父と母の恋愛と結婚の物語は、それ自体が小説のようだ（作品それ自体が小説なのだから、これは余計な言い方かもしれないが、私が仄聞していた事実と大枠は重なるのだ）。木辺が二〇〇八年に亡くなってすでに十一年目である。ある程度距離感もできたのではないかと思われる。くわえて、作者の筆の運びがこれまで以上に間違になっている。

同誌掲載の、切塗よしを「ヒナネコの唄」は、日本の音楽産業を背景とした、とても優れたエンターテインメントに仕上がっている。

東京の大手の芸能プロダクションに勤務していた浦部哲司は、オーディションに落ちた女性に声を掛けていた末端の関係者に巧みにつけこまれ、彼は大手を解雇されるとともに、岡山県初山市（モデルは津山市だろうか）の小さな芸能プロダクションに勤務することになる。樋口奈美子という三十八歳の女性を演歌歌手としてデビューさせるのが、そこでの浦部の仕事である。浦部はその小さな事務所の関係者でギターのうまいマキ、バイオリン奏者、理沙をくわえた三人のユニット「ヒナネコ」を作って売り出すことを考える。

市の観光事業に重ねたり、刑務所の慰問コンサートを行ったりと苦勞を重ね、とうとう「ヒナネコ」に、かつて浦部がいた東京の大手プロダクションから声が掛かる。ただし糸

件は、樋口奈美子を外した二人組みとしてあらためてデビューさせることだった。

音楽産業を背景とした小気味よい展開、「ヒナネコ」の三人と彼女らにデビュー曲を提供する往年のフォーク歌手、高品歌麿などの人物造形が卓越していて、とにかく感心してしまつた。難をいえば、後半の展開をもうすこしゆつたりとさせて、中篇から長篇ぐらいにまで膨らませてほしいというところになるだろうか。

なお、『あるかいど』同号には、昨年九月に亡くなった同人、小西九嶺の追悼特集が組まれていて、同人がそれぞれ短文を寄せている。『せる』第11号掲載の、谷山結子「僕のある日」は、自宅とハローワークのあいだを行き来しているだけのような「僕」の生活を描いて印象深い。

大学を卒業以来、アルバイトをしながら自宅に暮らしてきた「僕」は、現在三十五歳。半年前に「派遣切り」にあっているまは無職。ときおりハローワークに出かけているが「正社員」の公募にはことごとく落ちていく。子どものころから出来のよい兄が苦手で、兄の家族がやって来るときには、できるだけ自宅を離れていた。そもそも「僕」は兄だけでなく、およそ「人間」が苦手で、ひとりで電車にも乗れない状態になっている。そんな「僕」はハローワークで偶然出会っ

た二人の若い女性、リカとミサキとの交流のなかで、次第に前向きになってゆく。障害者手帳を取得して、障害者枠で正社員として雇われたという方法を、二人とも知的障害の検査でボーダーラインにあつて、ミサキは前回の検査でとうとう障害者手帳の交付を停止され、ミカは自分もそうなるのでは、と恐れている。しかし、「僕」はあつからんと生きている二人の姿に励まされ、やがてはひとりで電車に乗れるようになってゆく。

とにかく、リカとミサキが登場してから、俄然作品は生き生きとしてくる。二人の会話がとても小気味よい。

同誌掲載の、塚田源秀「ケージ」は、「ケージ」に入って二週間になる」と唐突にはじまる。「私」は五十歳を過ぎていて、年老いた母と古い屋敷で暮らしている。近くでカフェを経営しているが、実質は四十代半ばの「マユミさん」に任せている。母親が餌付けしたせいで屋敷には猫がどんどん増えてゆく。それを捕獲するために「私」はケージを購入したが、自分が入ってみると案外居心地がいい。「私」は次第にケージのなかで眠るようになつていったのだ。

「私」にとつてケージとは何だろう。後半にはケージの隣に蚊帳も登場する。カフカの

不条理という少々大袈裟になる。もつと自然な感じだ。ケージに入っている「私」に寄り添うようにしているマユミさんも魅力的。最後の「私」とマユミさんの、「片付かないというか、終らないわね」／「ああ、終らない。逆に、終るものって何かあるのかな」という対話にも印象深いものがある。

『文藝軌道』第16巻、第1号掲載の、牧野沙美「鹿南道場の春」は、文政十二年という時代設定ではじまる、旗本と道場を舞台にした歴史小説。文章もストーリー展開も驚くほど巧み。

それぞれ旗本の六男坊で、友人の犬丸左源太と松波新之助がそろってそば屋にゆくところから物語ははじまる。評判の美人を見にゆくというわけである。その美人がじつは新之助がかつて通っていた道場の道場主の娘、深雪だと分かる。道場主だった深雪の父は五年前に辻切りであって、道場も閉鎖されていたのだ。その道場を左源太の助けも得て、新之助は再建してゆく。それがタイトルにある「鹿南（しかなみ）道場」である（「ろくなん道場」とも読める仕掛け）。左源太が剣の達人ということもあって、それなりに門弟が集まってくる。

それに先立って新之助には祝言話があったが、新之助のほうから断っていた。相手は松波家よりずっと大きな旗本、佐橋家の娘、菊

代だった。交流試合での新之助の姿を見て、菊代がいわばひと目惚れしたのだ。新之助には武芸に秀でていない自分がどうして好意をもたれるのか分からない。ある日、その菊代が鹿南道場に入門にやって来る…。

深雪の父を辻切りした張本人が菊代の死んだ兄で、竹刀では左源太に劣る新之助が真剣をもつと左源太に優る剣術家であることが判明し…と物語は息もつかせない形で展開してゆく。ただし、文政十二年といえは江戸の後期、前年にはシーボルト事件も起こっている。すでに日本の外交が緊張していた時代だ。ここでは新之助、左源太、深雪、菊代の四人の関係に閉じているが、もうすこし物語を外側へと開いてゆく方向もある気がする。

『文宴』第131号掲載の、藤原伸久「雲を掴む」は、異性にも同性にも性的な関心をもたない若い男女の、ちよつと不思議な恋愛物語。基本的に一人称視点の作品だが、作者は「私」とか「僕」という表現をいっさい省略している。ともあれ、主人公、スグロは昨年大学を中退したという設定。いまはぶらぶらした状態で、近くの神社のおみくじを引くのだが日課のような日々。その神社で、不思議な巫女役、小鈴と出会う。

小鈴は会話で自分のことを「俺」という。見た目は上品な美人だけに、その喋り方にはかなり落差がある。どうやら小鈴はスグロの

うちに自分と同様の性的関心の欠如を見て取って、近づいてきたようだ。性的関心を自明のこととする社会では、二人はかけがえのない同志なのだ。小鈴はスグロに葬儀会社の仕事を紹介したり、実家へ連れて行って恋人のように紹介したりする。

異性にも同性にも性的な関心を持たない、その意味で天使のような二人が、どのように愛し合うことができるのか。タイトルにあるとおり、これはそういう文字どおり「雲を掴む」かのような恋愛譚なのだ。

一方『文宴』同号掲載の、中田重顕「小説蓮生貴子」は、「小説」と題されているものの、作者の実母と親族に関わると思われる、とても重い記憶を、重厚な筆致で書き継いだ優れた作品。

九十六歳で死んでゆく母を看取りながら、自分が産み落とされた満洲の地への旅も組み込む形で、母が「私」に語らなかつた記憶が一つ一つ開かれてゆく。戦死した伯父、生れて間もなく死んだ妹、夫に先立たれる宿命を孫にいたるまで引き継いで来たかたの女性の親族（それはついには「私」の娘にまでおよぶ）。こういう作品を読むと、文学の使命ということをおぼろげに得ない。もちろん、すべての文学がこのようである必要はない。しかし、書くことの本質的な意味の一つがこの作品には深く刻みつけられている。

『黄色い潜水艦』第70号掲載の、天野律子「夢の残り・タコ」は、年老いた逸枝（八十歳前後の設定だろうか）が、地域の老人会のお茶会に参加し、帰りに医院でマッサージを受け、自宅にたどり着くまでを淡々と描いている。逸枝の意識のゆったりとした流れにそのまま寄り添うような文体が心地よい。タイトルにある「タコ」は老人会の場にすこし居残って逸枝が眺める絵本に登場するとともに、逸枝の思い出のなかの遊具でもある。

冒頭には四行の詩が置かれている。「瞳を描き加えたら／タコはヒトの相になった／怒りと哀しみが／八本の足を震わせている」ここには、おだやかな逸枝のなかにも埋火のよう存在している「怒りと哀しみ」が示唆されているだろう。

『AMAZON』第496号掲載の、権野宏子「泊浜」は、「私」の出身地における、産業廃棄物最終処分場の建設の是非をめぐる住民投票を背景に描いている。

東京で教員を続けてきた「私」は、定年後さらに再雇用の五年間を勤め上げた。そんなとき、幼馴染みの次郎に誘われて、住民投票に反対票を投じるために地元にもどる。地元では、反対の昔馴染みもいるが、賛成派もある。過疎化してゆく地域、そのなかでの所有地の売買も絡んで、ひと筋縄ではゆかない。廃棄物処分場の建設とともに、集落の一つ加

治谷が埋められることにもなっていて、その加治谷がかつて「鍛冶屋」の集落だったという歴史的・民俗学的事実も語られる。

この作品では、次郎と「私」をはじめ、地元の人間関係も大事な要素になっているが、全体にもうすこし書き込みが必要ではないか。東京に暮らしていた「私」は、住民投票の資格を得るために住民票を地元に移したのだろうか（地元に移すの三ヶ月前に戻っていた、という冒頭の記述からすると、その時点で住民票を移した、ということかと思うのだが）。

それに、時系列が読み取りにくいところがあつた。いきなり、投票率が五十パーセントに満たず、開票されなかつたと最初に書かれていて、その後の記述との関係でややとまどう。それに、これは時系列どおりに書かれているほうが緊張感が出るのではないか。いずれにしろ、現在、それぞれの地域で切実に問われているテーマがここには記されている。

『VIKING』第821号、822号には、宇江敏勝「狸の穴」と同「雉撃ち」が掲載されている。どちらも作者の世界をたっぷり堪能することができる。「狸の穴」では強欲な男が穴に埋められる非情な結末、「雉撃ち」では牛の種付けの場面などにとくに惹かれた。